

---

# 東方幻視録

ユタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幻視録

### 【Nコード】

N4306R

### 【作者名】

ユタ

### 【あらすじ】

ある日、ある男が死んだ。男は強大な力を持っていた。それは人の世にあってはならない力だった。男は死に神に出会った。男は神のそばで自身の力の制御を行なった。そしてある世界に旅たつ事になった。

## プロローグ

SIDE???

ここは？

「ここは死者…いえ、世界に消された者が来る場所です」

目の前に羽を生やした女性が現れた

「消された…ってことは俺は死んだのか？」

「死んだ…というより存在そのものが消されました」

「何でだ？」

俺は疑問を問いかけた

「あなたは本来もってはならない力を持って生まれました。そしてその力が目覚めたため世界に消されたのです」

そういうことか

「なら、何で俺はここにいるんだ？」

消されたはずなら俺の意識はないはずだ

「世界に消されたものはここ…：天界にある神の城に魂をつれて来ます。因みに間違っって殺した方は輪廻の輪と現世の間に普通は行きます」

「そうか…それでさっき力があるといっていたな。俺の力は何なん

だ？」

「あなたの力は『全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力』です」

は？

「なにその東方は…それで俺はこれからどうなるんだ？」

「あなたをそのまま別の世界…いわゆる並行世界ですね。其処に転生させてもすぐに世界の意思に消されるだけなのでここで暫く能力の訓練をして貰ってから行きます」

「了解。そういえば名前を言ってなかったな。俺は白銀紅だ。よろしくな」

「私はアテネと言います。よろしくお願いします」

ん？アテナ…ってまさか…

「あの…まさかギリシア神話の出てきてオリュンポス十二神の一人のアテナ…ですか？」

「？ええ、確かにそれは私ね」

マジか……

「はあ」

「どうかしました？」

「いえ、なんでもないです」

こんな調子でがんばれるのか？

## プロローグ（後書き）

東方吸紅録が全く計画性なしで書いたものでそれを消してこれを書き始めました

## 人物設定 ネタバレもあるかも？

しろがねこう  
白銀紅

年齢…20（死んだ歳）

身長…187cm

体重…67Kg

能力…全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力

詳細

力が強すぎたため世界の意思に消されてしまった男ガイア

そのため天界のアテナのところに現れ能力の修行を付けることにした

全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力

詳細

東方の作品で出てきた全ての程度能力を扱うことが出来る  
常時発動型のものもある

東方の作品には出てきてないものの一度見た又は聞いた事のある  
程度の能力は修行すれば使えるようになる

とりあえずはこれくらいです。また、後でもう一つ能力が増える予定ですがそれはそのときに書くことにします

**修行という名の能力の制御 『闇を操る程度の能力』編（前書き）**

題名の通り能力の修行です

たいてい一話で終わらせていきます

後「主に空を飛ぶ程度の能力」や「あらゆる薬を作る程度の能力」などのものの修行は省かせてもらいます

というか省かないと多すぎるので…後偶に一話に二個の能力の修行をすることもありますので

## 修行という名の能力の制御 『闇を操る程度の能力』編

SIDE 紅

俺はアテナについて行き物凄く広い部屋についた

「さて、これからあなたには数百年くらいかけて能力の制御の訓練をしてもらいます」

始まるのか…待て

「今数百年って言ったな？」

「ええ、言いました」

「俺は普通の人間だぞ？そんなに訓練してたら寿命で死んじゃうわ」

「それは大丈夫です」

何が大丈夫だか…

「あなたには『全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力』があるんですよ？その中に『老いることも死ぬことも無い程度の能力』が常時自動発動してますので」

ああ、あれか。藤原妹紅の能力の……って

「それじゃあ、俺は死ねないのかよ」

「いえ、私たち神なら殺せますね。後不死殺しの武器など」

ああ、それもあつたな



「わかった。それじゃあ訓練を開始してくれないか？」  
「わかりました……よいしょと」

アテナは何処からとも無くノートパソコンを取り出した。え、ノートパソコン？

「なあ、何故ノートパソコンを起動しているんだ？」

「えっと、東方のwikiに行って能力を調べに……」

って、知らなかったのかよ

「では、まず……『闇を操る程度の能力』の制御から」

「って、そっちからかよ」

「当たり前です、あくまであなたの能力は『扱うことの出来る程度の能力』なんですから『完全に扱うこと』は出来ませんよ」

あゝ、やっぱりそうなるのね……

「わかった。それでどうすればいいんだ？」

「ええ、闇を操るといっても闇にはいろいろとあるのはご存知ですよね？」

「ネギまで言う転移魔法とかか？」

「ええ、あながち間違っていないません」

あながちかよ……

「闇には全てを飲み込むことが出来ます」

ええっと、つまり……あれか

「その応用で物をしまったり別の場所につなげたり出来る…であつてるのか？」

「ええ、正解です」

あつてたよ…

「ですので、まずどれくらい闇を操れるのか、試してみましようか」

試すって言われてもだな…

「何をすればいいんだ？」

「まず自分の影を操ってみてください」

影を操る？ええっと、こんな感じか？

俺は力を込めると俺の影が少し動いた

「そんな感じです。まだ、最初なので少しだけ動かせばいいです」

結構…くるもんだな

「大丈夫ですか？」

「駄目…少し操っただけでへとへとだ」

「そうですか…では今日はここまでにして明日にまたやりましようか」

「わかった」

俺はその場に倒れそのまま意識を手放した

**修行という名の能力の制御 『闇を操る程度の能力』編（後書き）**

…訓練ってこんな感じでいいのかな？

次回はチルノの「冷気を操る程度の能力」の訓練です

**修行という名の能力の制御 『冷氣を操る程度の能力』編（前書き）**

修行は主に全部紅視点で行きます

そういえば……影って闇扱いかな？……

## 修行という名の能力の制御 『冷氣を操る程度の能力』編

俺が世界に消されて自身の能力『全ての程度能力を操ることの出来る程度の能力』の制御特訓を開始して一年がたった最近ようやく、東方のルーミアの能力『闇を操る程度の能力』を大分制御できるようになってきた

「よつと」

俺は自身の影を伸ばしてアテネが放ってきた霊力の弾を影で飲み込む

「もう『闇を操る程度の能力』と『魔法を扱うことの出来る程度の能力』の制御は大丈夫ですね」

あれ、何か増えてない？

「なにか増えてる気が寸のですけど…」

「ええ、影を操るには『闇を操る程度の能力』と『魔法を操る程度の能力』の両方を制御しないといけませんので、一石二鳥でしたでしょう？」

確かにそうだけだな…

「結構疲れたんだけど…」

「では、次の能力の制御に行きましょうか」

あ、無視ですか。そうですか

「次は『冷氣を操る程度の能力』にしましょうか」

『冷気を操る程度の能力』か…

「それで、今度は何をすればいいんだ？」

「そうですね…：それでは、今から結晶を作ってみてください」

「わかった」

俺は『闇を操る程度の能力』から『冷気を操る程度の能力』の制御に移る

少しずつ手のひらに力を溜めて…：

「く！？」

途中痛みを感じたが、何とか結晶を作することに成功した

「お見事です。でしたら、次は背中に冷気を集めて氷の翼を作ってください」

氷の翼…：原作チルノの奴でいいか

俺は形を決めて、あ、当たり前だが少し形は変えるけどな。冷気を背中に集めるようにする…く！？なかなか制御が難しいな。

俺は悪戦苦闘しながら冷気を集めるが…

「駄目だ」

結局、翼は創れなかった

「そうですか、でしたら次はこれですね」

アテナが取り出したのは氷付けにされた…：なんだ？

「アテナ、それは何だ？」

「冷気を集めることが出来るのなら、氷付けの物を解凍できるはず  
です、そのためのものです」

なるほどな

俺はアテナに渡されたものに意識を集中した

…結構物体への干渉は難しいな

俺は結局解凍することが出来なかった

はぁ、一体全ての能力の制御が終わるのは何百後になるんだか

**修行という名の能力の制御 『冷氣を操る程度の能力』編（後書き）**

制御…なのか？

書いてて説明し貸してない気がする…まあ、いいか

暫くはこの制御訓練にお付き合いください。出来るだけ早めに終わらせる予定です

次回は… 「気を使う（扱う）程度の能力」 にします



**修行という名の能力の制御 『時間を操る程度の能力』＋その他編（前書き）**

前回、次は『気を使う（扱う）程度の能力』と言っていましたが…  
：何をすればいいか分かりませんので飛ばしました

因みに修行という名の能力の制御は多分、次回で終わりにします。

何故かって？し制御の文が思い浮かばないんです…本当にすみません（土下座）

**修行という名の能力の制御 『時間を操る程度の能力』＋その他編**

『冷気を操る程度の能力』の制御を始めて五年くらいで何とか戦うことに支障はなくなった  
今までで一番時間がかかったな…

「さて、次は…『時間を操る程度の能力』を制御してもらいますね」  
「わかりました。それで何をすればいいのですか？」  
「そうですね……」

考えてなかったんだ……

「とりあえず発動させて見ませんか？」  
「わかった」

こういうのは集中だよな  
俺は能力を発動させるために集中した……

「があ!？」

急に酷い痛みが襲い、意識を手放した

「…て…さ…」

ん…

「おきてください」  
「あ…」

目を開けるとアテナがいた

「そういえば俺は…」

「能力の使用に脳が付いていけなくなり頭痛という方法で警告をしたらなんです」

そうだったんだな

「ゆっくり行きましょうか」

「ああ」

それから数百年くらいがたった  
最近では一分くらいまで時を止める事が出来るようになった

「はあはあはあ…」

「大丈夫です？」

「何とか…」

「では、次の能力の制御に行きましょうか」

まじかよ…

「次は…『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』ですね」

フランの能力か…

「では、能力を発動してください」

「ああ」

俺は能力を発動させた

「う…」

能力を発動させてみた世界は、殆どのものに目みたいなのが付いた世界だった

「何が見えますか？」

「全てのものに目…みたいなものが見える」

「それを手元に引き寄せて手で潰してみてください」

俺はアテナに言われたとおり目みたいなのを引き寄せ…握りつぶした

そしてた目を引き寄せた物体は壊れた

「うお!？」

「これが『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』です」

これが…

「では次に行きましょうか」

「これで終わり？」

「ええ、後は回数をこなすだけです」

「ああ」

さて、後何百年かかることやら

**修行という名の能力の制御**

**『時間を操る程度の能力』**

**＋その他編（後書き）**

次を最後にします

## 修行という名の能力の制御 『境界を操る程度の能力』編

前回の『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』の制御が終わって千年くらいか？やっとなつて後一つの能力を残すことになった。『時間止める程度の能力』も空間を広げることも出来るようになった

「それでは最後の能力『境界を操る程度の能力』ですね」

八雲紫の能力か…

「それでは能力を発動してください」

「ああ」

俺は能力を『境界を操る程度の能力』にした

因みに今のところ殆どの能力を同時発動できるようになっている

「発動しましたね？」

俺は頷いた

「それで何か変わったことはありますか？」

変わったことか…

「人の心とかの境界…まあ、いろんな境界が見えますね」

まあ、これも『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』と同じで見えなくすることも可能だろう

「でも、八雲紫のように空間の境界を開いてみてください」

あれみたいにな？……こうか？

俺の手で空間を開くような動作をする

そしたら目の前の空間が少し裂けた

「少しですか……では……」

それから『境界を操る程度の能力』の制御で数年が経過した

「ふう……」

今では殆どの境界を操ることが出来るようになって紫みたいに境界を渡って移動することも出来るようになった

「もういいですね。では、そろそろ世界に転生させますね」

「ああ、いろいろ助かった」

「いえいえ、それとここでの時間の経過はあちらでの経過したと時間と同じですので」

つまりは……

「ここで千……三百くらいか？それと同じ歳ってことか？」

「ええ、では最後に、あなたにはもう一つ能力があることを教えましょうか」

え、まだあったのか？

「その能力は『相手の能力を程度能力として知ることが出来る程度の能力』です」

「えーと…説明お願いできますか？」

「簡単に言いますね。紅はFateというアニメを知ってますか？」

Fate…あゝあれか

「一応知ってるぞ」

「あれの主人公の力、投影を程度の能力として表すと『主に刀や剣などの武器を生み出す程度の能力』として知ることが出来るので紅も練習すればこの能力を使用できるようになるのです」

「…チートですか？」

「チートですね」

はあゝ

「では、送りますね」

「ああ」

「あ、最後にあなたの容姿と種族は変わりますから」

「それを最初に言えー！！！！！」

そして俺の意識は無くなった



**修行という名の能力の制御 『境界を操る程度の能力』編（後書き）**

次からやっとうと東方の部分に入れます

## 修行が終わった時点での設定

しろがねこう  
白銀紅

年齢…20（死んだ歳）

性別…男

身長…187cm

体重…67Kg

好きなこと・物…料理 掃除 甘いもの全般

嫌いなこと・物…人を見下す奴

種族…幼獣（九尾）

能力…全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力

詳細

力が強すぎたため世界の意思に消されてしまった男  
そのため天界のアテナのところに現れ能力の修行を付けることにした  
全ての程度能力の性ぎゃが出来るようになり東方の世界にいくこと  
になった

全ての程度能力を扱うことの出来る程度の能力

#### 詳細

東方の作品で出てきた全ての程度能力を扱うことが出来る  
常時発動型のものもある

東方の作品には出てきてないものの一度見た又は聞いた事のあるく  
程度の能力は修行すれば使えるようになる

相手の能力を程度能力として知ることが出来る程度能力

#### 詳細

く程度の能力と表されていない能力でも自身は程度能力として知  
ることが出来る

例…Fate主人公の能力『主に刀や剣などの武器を創造する程度  
の能力』

## 第一話 行き成りの超展開!?(前書き)

これが俺クオリティ!行き成りの超展開なんてよくあることだぜ!  
……一応は反省してる気です……はぁ。そして何故こんな展開かというと……俺は全く東方を知らないからだ!……すみません。本当にすみません

## 第一話 行き成りの超展開!?

SIDE 紅

俺が東方の世界に転生して……大体三千年位経ったか? まあ、それ位だと思う

その間の模写は無いのかって? 作者が知らないらしい。ん? なら俺が説明しろと? 仕方ないか…

俺が転生して大体五百年か千年くらい経ったところか諏訪大戦が起きたのは。まあ、したのは、観戦した位だったけどな。後は……俺が転生したとき種族が変わるといわれて覚悟はしたんだがな……種族がなんで幼獣なんんなよ。後は……たまに妖怪が襲ってくるくらいだったな。まあ、かいりうちにしたけどで、今俺がしていることは

「紅」

「妹紅、いい加減行き成り抱きつくのは止めろ」

妹紅が蓬莱の薬を飲む前の屋敷で過ごした時代の屋敷にいる因みにも五年くらいすんでるな

「ええ」

「たく、そういえば藤原様は何処に行ったか知らないか?」

どうして屋敷に俺がいるかって? 理由としては妖怪に襲われていたところを俺が助けただけ、それで屋敷に住まわしてもらってる

「また、輝姫のとこだよ」

「そうか」

で、今はかぐや姫：月の姫様が来ているんだよな。大分経つし：そろそろ月の迎えでも来るかな？

因みに俺と妹紅は面識あるからな。ほぼ成り行きだったけど

「それじゃあ、いつもどおりやるぞ」

「ああ」

俺は妹紅に霊力の使い方などを教えている

俺自身、霊力を使えるからな

さて、今日は何を教えようか：

S I D E 紅 O U T

S I D E 妹 紅

私は紅の修行を終えてお父様が帰ってきたと聞いたからお父様のものに向かってる

「お父様！」

「おお、妹紅よ。何か発展はあったか？」

私は首を横に振るう

「そうか……」

私は紅に恋愛感情を抱いている。お父様にそのあたりを聞いているいろとしているんだが……何も反応を示してくれない

「そうだ。添い寝でもしてみたらどうだ！少しは反応を示すかもし

れんぞ」

「そそそ添い寝!?!」

私はお父様の言葉に顔を赤くした

「ものはためしだ。私は応援してるぞ!」

私はお父様の寝室を出て自分の寝室に戻った

添い寝…添い寝か…よし!

私は紅の寝室に向かった

「紅…」

よし、寝ているようだ

私は寝ている紅の床に潜り込んだ

紅の匂いがする…

私は睡魔に任せて眠った…

SIDE妹紅OUT

SIDE紅

「ん…もう朝か」

俺は窓から入ってくる光に目を覚ました  
ん?何か違和感があるな

俺は違和感がするほうを向くと…

「は?…」

そこには妹紅がいた

「待て待て待て…昨夜は誰もいなかったはず…」

つてことは俺が寝た後にか？

「とりあえず起すか」

とりあえず妹紅を起して本人から聞こう

「妹紅。起きろ朝だ」

「ん…紅く、おはよう」

「おはよ。つて違う、何で俺の布団に入ってきたんだよ？」

「え！？それは…」

何で顔を赤くしてるんだ？

「えっと…私は…その…なの」

「悪い。聞こえなかった、もう一度頼む」

「だから！私は紅のことが好きなの！」

「は…はああああ！！」

俺は行き成り言われたことに驚いた  
は？好き？妹紅が俺を？

「それで…紅の返事が聞きたいの…」

「あ…そのだな…俺も…だ」

「え？」

「だから、俺も好きなんだよ！」



あゝ！絶対俺の顔真っ赤だよ…

「そ、そうか…じゃあ、これからもよろしくお願いします」  
「あ、ああ」

たく…さて、どう藤原様に説明するか…

## 第一話 行き成りの超展開!?(後書き)

…妹紅?…はあ。前書きでもいいましたが本当にすみません!  
!自分は東方について無知に近いのでここから殆どオリジナルを行  
かせて貰うためこんな出足にしました。何度も言いますが本当にす  
みません!

## 第二話 旅たち（前書き）

待ったく文が思い浮かびませんでしたので超g d g dです

ああ…東方の昔の知識が欲しい

毎度お馴染超展開です…本当にすみません

ご都合設定などがありますのでそれが嫌な方は見ないことを進めます

## 第二話 旅たち

### S I D E 第三者

「はあはあはあ…ここまで来ればいいか…」

暗い森の中を一人の男性が走っていた

男性…：紅はある程度走ったとひころで止まった

「……」

何故紅が森の中を走っているかという約三時間前にさかのぼる

### S I D E 第三者OUT

### S I D E 紅

「は？輝夜が月に帰る？」

初めて聞いたぞ

「そうなんだ。次の満月の日に帰るって…」

はあ、あの馬鹿姫め…

「とりあえず、其の日はどうなるんだ？」

「何でも、帝が兵を出すとかになってるけど…」

月の兵士に地上の兵士が勝てるわけ無いんだがな…

「仕方ない。少し準備でもするか…」

「え？紅も行くの？」

「ああ、流石に友をみすみす月に帰らせるわけには行かないからな。第一、輝夜が帰りたいと言っても言ったのか？」

「ううん。帰りたくないって言ってた」

「なら決定だ」

さて、準備でもするか…

くそして満月の日く

「…なぜいる妹紅？」

「紅一人だけ行かせたくないんだ」

全く…お前と言い藤原様と言い…

「そう言えば帝の兵士が見当たらないな」

「ああ、それなら私が帰したわ」

何時から聞いてた輝夜？

「何故帰したんだ？」

「あら？あなた一人のほうが安心でしょ？そもそも月の科学力に地上の人が勝てると思っていないしね…」

一瞬悲しそうな顔した輝夜…

「それに、紅は結構強いでしょ？」

「あ、ああ。一応な」

身体能力が人間並みに落ちてるけど…いざとなったら幼獣かすればいいんだしな。それよりも

「何故ここにいますか？藤原様」

「娘と娘の婿だけを行かせるわけには行かないだろ？」

そうですか…

「…来た様ね」

輝夜が満月を見上げながら言った

俺らも輝夜の向いているほうを見ると…そこには、牛車っぽい何かが見えた

そしてその牛車には赤と青色の服を着た女性…八意泳琳がいた

「姫様、迎えに参りました」

「御苦労さま永琳。だけど、私は月に帰る気は無いわ」

まるで困ったように頬に手を当て、困っていないように笑った泳琳は護衛軍に振り返った。

「そういうことです。私は姫様と一緒に地上に残ります」

「それが許されるとおもいきですか、八意様？」

「そこを許して欲しいのだけど」

「それ以上言うなら…」

護衛軍はそれぞれ武器…銃を構える

「最後よ。引きなさい」

「話になりませんね。謀反人八意と地上で穢れた罪人を始末せよ!」

護衛軍はレーザー砲や、銃火気を使用してきた

俺は輝夜と妹紅、藤原様に当たらないように霊力で障壁を張る

泳琳はその間に弓で護衛軍を殺していく

そして護衛軍のレーザー砲などが全て泳琳に酋長したのいいことに障壁に使っている霊力を下げ俺も護衛軍に向かって駆け出した  
そして一番近い護衛軍の首を刀で刎ねた

『!?!』

俺の存在を思い出したのかレーザー砲などを俺のほうに向けようとする

泳琳はその隙を見逃さずに次々に敵を殺していく

そして俺と泳琳がほぼ同時に最後の護衛軍を殺した

「これで、終わりか」

「そのようね」

この時の油断がいけなかったのか

まだぎりぎり息が合った護衛軍は最後の力を振り絞って一つの塊を空に投げた

その塊は…手榴弾だった

『!?!』

泳琳を弓で貫こうと考えるがそれをする一瞬で爆発しかねない  
そして俺は……幼獣としての力を解放した

「!?!? あなた……」

俺は幼獣としての身体能力を活かし、一瞬で手榴弾の元に飛び蹴り上げた

そして幼獣としての身体能力で蹴り上げた手榴弾はあるか空の上で爆発した

その後は……その場から離れたい一瞬で近くの森の中に入っていた

〽回想終了〽

「はぁ……」

これからどうする……

俺はこれからのことを考えてると回りに妖怪が集まってきた  
今の俺は尻尾を一つしか出していない

「……………」

俺は妖怪たちの「死と生との境界」を弄くって妖怪たちを殺した

「……………」

俺は尻尾を九つにしてそして眠りにつくことにした

こうすると低級妖怪は寄ってこなくなることが分かってる

さて……明日からどうするか

そんなことを考えながら俺は意識を手放した

「……………ん」

もう朝か……



「はぁ……」

妹紅に会いに…いけないな。  
俺がそんなことを考えていると…

「紅…」

妹紅の声が聞こえた

「妹…紅…」

俺が妹紅の方を見ると妹紅の黒かった髪は白くなっていた

「なん…で…」

「紅が妖怪だったって私は紅のことが好きだ」

妹紅…

「いいのか？俺は死なない。いや、死ねないんだぞ？」

「それは私もおんなじだよ」

まさか…

「まさか…お前…」

「うん。八意さんに蓬莱の薬を貰って飲んだ」

「其処までするのかよ…」

「紅と一緒にいたいからさ」

はは…どうするか考えてた俺が馬鹿みたいだな  
俺は妹紅に近づき、抱きしめた

「あ……」

「これからよろしくな。妹紅」

「こっちこそ、よろしく頼むぞ。紅」

俺と妹紅は見つめあい、しだいに顔と顔が近づき……キスをした  
もう……離さない。絶対に……

## 第二話 旅たち（後書き）

第二話投稿終了

ああ、無茶苦茶時間かった

本当はこの前に日常を書こうと思ってましたが…平安時代って何か書いていいわからず、断念しました

ので、早いかもしれませんが旅びたたせました

そして、一番悩んだのが妹紅にどうやって蓬萊の薬を飲ませるかです  
原作と違い輝夜と友達関係であり父が生きているのでこうゆうのし  
か思い浮かびませんでした

ところどころ構造設定があるかもしれませんが…これが作者の限界  
です

今回はフレイス様の作品とのコラボで異変を考えるのに時間を使う  
ので更新は遅くなります。また、遅くなりすぎるようでしたら旅の  
話でも投稿するかもしれません

**コラボ 魔法少女リリカルなのはStrikers ～未来を変えるスターロード**

ユウキの口調が安定しねー！！？

間違ってたらすみません

因みにユウキの戦い方の一つは感想欄に書かれています

それといまいちライフの減りの基準が分からなかったから今回はこんな話になりました

SIDE 紅

俺と妹紅と一緒に旅を始めて十年くらいが経過した

俺はその間に妹紅に妖術などを教えている

一番の見込みが早かったのが火だ

もう原作をほとんど覚えていないが確か妹紅は火のスペカを使用していたはずだ。だからだろうな

…さて

「そろそろ出てきたらどうだ？」

「？紅どうしたんだ？」

俺は何も無い空間に呼びかけた

しばらくするとその空間が割け紫…いや

「別の世界の紫か」

「あら。わかるのね」

「ああ、俺と会った紫とは妖力の量が違うからな」

「あら…」

紫が探るような目で俺を見てきた

……

「!？」

紫が驚いた顔をした

紫が俺に能力を使ったことは分かった

俺は逢えてそれを放置していた  
俺にも「境界を操る程度の能力」が使えるんだ。同じ能力を受け付けるわけが無い

「どうして…」

「自分の能力が通じないか…だろ？残念だが俺の能力は「全ての程度能力を操る程度の能力」を持っているからな」

因みに妹紅にはもう俺が一回死んで生き返った事を話してある

「そう…：少しお願いがあるのだけど…：いいかしら？」

「俺は構わんが妹紅は…」

「私もいいぞ」

「だ、そうだ」

「そう…：なら、こっちの世界のある人物と弾幕ごっこをしてもらいたいだよ」

「弾幕ごっこ？」

「ああ…：そういえばこっちにはまだ無かったわね…：弾幕ごっこは…」

紫が弾幕ごっこについて説明した

「へえ…：それでそのスペカって言うのはどうやって作るんだ？」

紫はさらにスペカの作り方から使用方法まで説明してスペカの元となる紙を渡してきた

そして俺らはスペカを作った

妹紅は原作どおり（だと思う）のスペカができて俺は…

幻符「写し見の鏡」

「真相の符」

幻符「幻の結界」

幻符「囲いの舞」

幻符「リジル」

：あゝ、どんな弾幕なのか感覚で分かるが：結構酷いものもあるな

まず幻符「写し見の鏡」だがこれは相手が放った技を吸収して自分のスペカとして使用ができるようになる符だ

次に「真相の符」は東方キャラのスペカのどれからランダムで発動するらしい

次の「幻の結界」相手に幻術を見せて本来ある場所に弾幕が無く、無い場所に弾幕を見せるスペカだ

幻符「囲いの舞」は相手の四方から大量の弾幕が襲ってくる物だ最後の幻符「リジル」は相手に向かって大量の弾幕が数秒ごとに向かっていくスペカだ。しかも隙間が狭く数秒ごとだから次々と弾幕が迫ってくるため大抵のやつならこれでピチヨルな

「：結構酷いものね」

「わかるのか？」

「ええ、なんとなくだけどね。それじゃあ、向かいましょうか。あつちも任せていることだしね」

「ああ」

俺と妹紅は紫のスキマの仲に入って行っただけで、どんな奴が相手だ？

SIDE紅OUT

SIDEユウキ

「…ふう」

俺は早苗の入れてくれたお茶を飲んで待ったりしている  
何で待ったりしてるかって？ 紫が異世界の人を連れてくるといって  
から結構時間がかかったからだ

「ユウキさん、お茶菓子を持ってきました」

「あ、悪いな。早苗」

「いいですよ」

「…ずいぶん和んでるわね」

「うわ！？ 紫いつ戻ってきてたんだ？」

「ついさっきよ」

紫の後ろに一人の男性と…妹紅？ がいた

「因みにあの妹紅は異世界の妹紅よ」

紫が説明してくれた

「そうなんだ。あ、スペカは…」

「さっき作ってもらったわ」

…行動が早いですね

俺は男性に近づき

「初めまして、俺はユウキって言います」

「ああ、俺は白銀紅だ。よろしくな」

紅か…



「じゃあ、今日をお願いします」

「ああ、それで一応ルールは教えてもらったがスペカの枚数は何枚にするんだ？」

「紅は何枚持ってるんですか？」

「一応五枚だな」

「じゃあ、俺も五枚にします」

「そうか、悪いな」

「大丈夫ですよ」

俺と紅さんはそれぞれ一定距離離れて

「さてと」

紅が目を瞑ると紅さんの頭に狐の耳が現れ尻尾が九つ出てきた

「え！？九尾！？」

「ん？そういえば言ってなかったな。俺の種族は妖獣で九尾だ」

これは油断したら負けるかも…

俺は手元のディスクを展開した。そのディスクにはLP4000と書かれている

「？（何でディスクを展開した？）」

「それじゃあ、弾幕ごっこ、初めていいわよ」

紫の合図と共に様子見の弾幕を放った

紅は俺の弾幕を避けながら弾幕を放ってきた。俺はそれを能力で反射したり吸収したりしている

「ふうん：「全てを反射する程度の能力」：ってところか」  
「!？」

もう俺の能力を見破った!？

「ああ、俺の能力は「相手の能力を程度能力として知る事ができる程度の能力」と「全ての程度能力を扱う事のできる程度の能力」の二つだ」

まさか、二つの能力を持ってるなんて!？

「で、あたってるか？」

「あたってるよ。俺の能力は「どんな攻撃をしても反射する程度の能力」だからな」

「とりあえずこの能力は後で練習しないとな」

練習？

「俺の能力はあくまで「扱う事のできる程度の能力」：最初っから使えるわけじゃないんだ：よ！」

紅が妖力が今までよりこもった弾幕を放ってきた

俺はそれを回避する

「……なんとなく分かった」

？何が：

「そのディスクに書かれているライフを零にすればいいんだな」

!?

「よく分かりましたね」

「なんとなくだがな。お前の能力は反則…いやチートだからな。だから能力を使用して弾いてるのにそのディスクに書かれているライフが減っていたからな鎌を掛けてみた」

さっきの妖力のこもった弾幕が…

俺は残りLPを確認した。残りライフは3900か…

「幻符「囲いの舞」！」

紅がスペカを発動した

俺の四方から大量の弾幕が迫ってきている

「く!？」

俺は回避できるものだけ回避して無理なものは反射して相殺したりしている

残りライフ3500!結構持つて行かれたか…

俺は普段被弾して相手が攻撃を止めようとした時に狙うが、この幻符「囲いの舞」は一定量の弾幕が迫ってきているから自らの意思で止めるんじゃないと思った

「まだまだ行くぜ!」

紅の周りから弾幕が回りに拡散するように放たれる

「幻世「ザ・ワールド」!!!時を止まれ!!!」

俺は咲夜さんに教えてもらったスペカを使用する  
その間に俺はナイフを投げようとするが

「幻符「写しみの鏡」！！」

投げようとする前に時が動き出した

「な！？」

「俺の能力を忘れるなよ！」

そうだった！紅の能力には「時を操る程度の能力」も操れたんだ！？

「幻世「ザ・ワールド」！」

一瞬で回りに大量の弾幕が配置されていた

「く！？風剣「蒼破一閃」！！」

俺は自分で作ったスペカを使いまわりの弾幕を全て吹き飛ばす

「うおっと！？」

何とか難を逃れたけど、間に合わなかった弾幕を能力で吸収したから残りライフ2000になっていた

「どうして俺のスペカが…」

「幻符「写し見の鏡」は相手のスペカを自分のスペカとして使用できるスペカだ」

そんなスペカが…

「幻符「幻の結界」！」

周りに再び弾幕が配置された  
俺はそれを避けているんだが…

「な！？ライフが減っている！？」

まさか！？

俺は今まで吸収していた弾幕を一斉に回りに放出した  
そしたら何も無い位置で弾幕が消えていった

「やっぱり…」

あのスペカは幻術で本来の位置に在る弾幕を隠して無い位置に弾幕  
を見せるスペカ…気づくのが遅かったらライフをもっと削られてい  
たかも

残りライフ1000か…

「幻符「リジル」！！」

紅さんの近くから大量の弾幕が展開されどんどん俺に向かってきて  
いる

「く！？反射「弾幕返し」！」

俺は自分で作ったスペカを使用した。これは相手の攻撃をすべて跳  
ね返すスペカ。チートだけどこの間、俺は何もできない。まあ、体  
力を回復する事ができるけどな  
それから紅のスペカが終わるまで体力を回復し続けた

「……チートだな」

「そうだけど、この間、俺は何もできないけどな」

俺はスペカを解除した

「これが最後のスペカだ。『真相の符』！」

俺はどんな弾幕が来るか構える

そして紅を中心として周りに弾幕が放たれ俺に向かって火の鳥を模した弾幕が突っ込んでくる

これは！？

「これって妹紅のスペカ不死『火の鳥 一鳳翼天翔一』！？」

「『真相の符』はランダムにスペカを一枚発動するスペカだ」

それじゃあ、発動するまでどんなスペカが出るか分からないのかよ  
！？

結局俺のライフが0になり弾幕ごっこは俺の負けという結果になった

「ふう…結構楽しいな。弾幕ごっこも、そういえばユウキの最後のスペカはなんだったんだ？」

「え？ ああ、最後のスペカは結界『無敵結界』だ」

「…ああ、スペカ名でなんとなく分かった。それ発動したら、相手に勝ち目あるのか？」

「ない」

「即答って」

実際勝てないでしょ、なぜかこのスペカ、発動無効ができないんだし

「それじゃあ、俺らは帰るわ」

「ああ、今日は楽しかった」

「俺もだ」

紅と妹紅は紅の能力で作ったスキマから帰っていった

「そういえば早苗たちは何してたんだ」

「え？あっちの世界の妹紅さんといろいろと…／／／」

…何を話していたんだ！？

SIDEユウキOUT

SIDE紅

「どうだったんだ？」

「ああ、初めての弾幕ごっこだったが楽しかった」

「そうなんだ…」

「そう言えば妹紅は何を話していたんだ？」

「え！？…えっと…／／／」

まじ何を話していたんだよ！？

コラボ 魔法少女リリカルなのはStrikers ～未来を変えるスターロード

やっと書き上げました

フレイス様、どうだったでしょうか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4306r/>

---

東方幻視録

2011年11月17日12時30分発行